

「惧と心痛に身を縮めてゐたらしく、羽叩きもせず藻掻きもしないで、たゞ血走つたやうに赤い眼を、氣味悪げにきよときよとさせて、杉浦の部屋の中を見廻してゐた。」

小野はそれを見て、「一種の驚嘆を、杉浦に覚えないうるれなかつた。杉浦が思ひ切つて、小野などか思つたばかりのことを、不甞實行する一種意力の強さと、又その鳩を此處まで持つてくる間の一種の辛抱強い持ち城へと、それにも増して、そんな神前の鳩を、わざ／＼整んできたたりする一種の悪魔性にと、彼は目を睨らずにはゐられなかつた。」

「ふうむ、そんなことをしても君は祟りが怖くないのかねえ。」

小野は強ち迷信家でないにしても、そんな風に聞かすには居られなかつた。

「うむ。別に神前なんざあ怖くはないが、かうして掴んで来た所、餘りいゝ氣持ぢやあない。」
さう云つて、彼は鳩を掴んでゐた手を、逐ひ放つやうに放した。と、鳩は夜の座敷の中ながら、初めて翼を使ふべく解放されたに俣らず、眼がさうよく見えなないのか、ひどく喜びもしない調子で、大儀さうに翅をばさつかせながら、それでも横飛びに、やつと座敷の隅の窓の所へ行つて、尻込みするやうに暗い隅に身を潜めた。そしてまだ血走つた眼をばちくりさせて、杉浦と小野の方を眺めてゐた。

杉浦もそれをちつと見凝めてゐたが、やがてくるりと振り返つて、小野に向つて突然云つた。

「おい小野、君と一緒に僕も出よう。そしてどこかへ行かうぢやないか。これから君が歸つた後、此奴と一緒に寝るんだと思ふと、さすがに俺も厭になつた。一緒に何處かへ行つて酒でも飲まう。」
「それ見ろ。祟りだ！」

小野はそれを聞くと、思はずかう云つて、併し彼の言葉に賛成して一緒に杉浦の下宿を出ることに

した。が、併しその時云つた彼の「祟り」が、それから約一年の間に、どんな形となつて現はれ、以後の小野と杉浦との半生に、どんなに慘憺たる影を投げたかは、彼自身もとより知る由もなかつた。二人の出た夜の街路は暗かつた。

第二章

二人の足は自ら灯火の明るい方へ向つた。

杉浦の下宿のある暗い横町から出ると、さすがに歳末近い本郷通りは、早くも賣り出しの店飾りや紅白の旗などで装はれて、その下に宵の口の徒らに明るい燈光を、怪しく入り亂らしてゐた。そして人々の黒い影が、十二月の寒い御風の中を、アスファルトに下駄を高らかに鳴らして、不安さうに往來してゐた。殊に賣出しの飾り旗がぱた／＼と翻つて、二人に更に落着かない騒音を感じさせた。

「どこかで酒でも飲まうか。」

小野はマントも襟巻もない襟首を、縮めるやうにして四邊を見廻しながら、さう云ひ出した。

「うむ。飲まう。」

さう大して酒を呑めない杉浦も、言下に應じた。

まつたく先刻からの、理由のない、併し捉へてきた鳩の故だともいへるが、——妙に湧いてきた不安と焦躁から逃れるには、まづさし當り酒でも飲む外なかつた。

そこで二人は近所の、小さい酒場へ寄ることにした。酒場の中も、明るく騒々しかった。多くの學生や勤人や労働者たちが、凹字形に設置された大理石の卓子の上へ、杯の底をかち／＼はせて、高聲に話し合つたり、給仕女を呼んだり、腰を浮かせたりして、飲んでゐた。そして向うの、一段高い帳場裏の傍からは、大きな喇叭付の蓄音器が、もう幾回も幾回も掛けた後と見えて、盤の傷みを露骨に刺せながら、円形の「流坂」か何かを泣かせてゐた。そしてその音に連れられたやうに、給仕女が腰から上を浮かして、凹字形の卓子の内側を泳いでゐた。そこには更に騒々しい、明るい、不安な壓迫が在つた。彼等は鳥渡入るのを躊躇したが、その途巡した顔を見合せると、お互に躊躇したのを恥ぢるやうな心持で、思ひ切つて中へ入つて、丁度その突端の明いてゐる椅子へ、並び合つて腰を下ろした。小野が強ひて勢よく腰を下ろさうとすると、その安價な木製の柄付椅子は、くると圓い座席を廻轉させた。それが妙に腹立たしく滑稽だつた。

二人は強い酒を命じて、立続けに二三杯づつ呷つた。それで、腹の中は忽ち火のやうに熱くなつた。が、酔はなぜか胸から下を掻き亂すだけで、頭へ上つて來なかつた。いや、血はかつと頬や額へ上つても、どういふものか心から、精神的に酔つて來なかつた。二人は酒盃を前に颯り勝ちだつた。

と、その時二人の向うの、二二間離れた處に、その場で隣り合つて知己になつたらしく、二三人の會社員らしいのと學生とが、頻りに杯の交換などをしながら、聲高に肝膽を照し合つたやうな言葉を交したり、握手をしたり、會社員が誘ふやうに、學生唄を唱つたりする一組があつたが、先刻からその前に立つて、後の空席に腰を寄せ、斜に身をそらして、呆れたやうな面門がつてゐるやうな、悪戯的な眼で見下ろしてゐた一人の給仕女があつた。さうしてそれは打見たところ、この酒場中では一番綺麗な、どこかセルロイドのやうな薄手な感じのする、狐めいた美人型の女だつたが、前の二組と相

手になつて、二言三言冗談などを云つてゐる間に、ちよく／＼此方の沈んでゐる様子を見てゐたらしく、氣にでもなるのか寄つて來て、自信ありげな誘ひの笑みを口の端にちらと浮かべながら、

「此方どうなすつたの、もう一杯持つてきませうか。」

と、杉浦の顔を覗き込んだ。

「いや。」が、杉浦は相手にならなかつた。「それより勘定をして來て呉れ。——もう出よう。」

かう言つて彼は小野の方を向いた。

「さう。」と給仕女は、鳥渡自信を傷つけられたやうに、それでもちつと杉浦の、濛い八の字を寄せた圓顔の額を、見凝め返した後に呼んだ。

「十四番さん誰方？ お會計よ。」

「出よう。」

二人は金を拂つて、重い帽子の開き戸を、ぐいと押し、再び街中へ出た。

先刻から引續いてゐる妙な不安と、何物か求めて得られない焦躁と、それから今飲んだ酒の、陰に籠つた酔ひ方とは、二人に到底その儘で済まされない衝動を與へた。少し捻録な、荒んだ遊蕩氣分が二人の胸に湧いてゐた。彼らは口に出して云はないでも、もうかうなつてはお互に、自分たちのゆく先を知り合つてゐた。

二人は既橋行の電車に乗つて、淺草の方へ向つた。

雷門で下りて見ると、彼等は妙な光景に出會つた。

丁度吾妻橋の方から、彼等の行かうとする仲店の方へ、何かの不思議な行列が、通りかゝつてゐた。先頭は、もう仲店の方へ曲つて了つて、何か駱してゐる旗差物に、書いてある字は讀めなかつたが、

異様な假裝行列であることは、すぐ知れた。が、その間遠くに叩く太鼓の音と、割合に静肅を保つた隊伍は、何のためのものか、まるで見當がつかなかつた。それらの人々は、各々張子の妙な獣の面や首を被つて、お伽劇に出て来るやうな、象徴的な装をしてゐた。豚か猪のやうなのもあれば、牛や馬のやうなのもあり、何だか譯の分らぬ牙を持った獅子虎等の魔物のやうなのもあれば、明かに鬼を現はしたと見える、卑ろ滑稽な子供だましのもあつた。小野には直ぐに四遊記などに現はれた、もろくの魔物が連想されたが、その異風滑稽な、併し何となく妙な氣のする行列に、彼らは暫らく足を停めて、眼を睨らすにはゐられなかつた。

どん、どん、と、間の抜けた太鼓の音につれて、その行列はなかく盛きずに、續いて仲店通りを通つて行つた。行人たちは、みんな歩みをとめたり、又はその行列につきながら、雑沓して見てゐた。小野と杉浦は、その雑沓に交つて、さすがに従いて行きはせずに、暫らく行列の過ぎるのを待つてゐた。

「何だらう。」

「何だらう。」

二人は顔を見合せて、見物人たちの話に耳を傾けたが、誰もその謂はれを知つてゐるものは、あたりにもないらしかつた。

と、その行列が、最後になつたところに、高張提灯を點けた、一人の黒衣の僧形の人がゐた。その人は、まさか假裝のものではないらしく、行列の後から、監督をしてゐるのだと見えて、幾らか雑沓に採まれて遅くなり勝ちな人たちに、

「さあ、遅れないで、續いて―」などと、高張を振り／＼聲をかけてゐた。

彼らには、益々行列の譯が解らなくなつた。で、その最後の僧形の人が彼らの前を通つて行つた時、何だか譯が分らないながらに、従いて行つて見ようとする群集心理に壓されて、二人も後から追ひ付

きながら、思ひ切つて小野は、つかつかとその僧に近寄ると、

「何ですか、この行列は？」

と、進んで訊ねて見る氣になつた。

「え？」とその僧も、少し足を緩めて、振り返つて小野を見たが、彼の様子が知識階級の、普通の野次の見物と違ふのを見て取ると、少し鼻にかゝつた慇懃な調子で、説明して呉れた。その言葉に依ると、その日は丁度釋迦の下山だつたか入山だつたかの、何百年目に當るとかで、その祭に「悪魔行列」を行つてゐるのだといふのだつた。

「悪魔行列？」 は、あ、成程さうですか。「小野はふとその僧の説明を、面白く感じて少し微笑みながら、黙つて従いて來てゐる杉浦を顧みて、それから猶も云つた。「ちやあこれはみんな悪魔なんですかね。」

「さうです。百人ゐるんです。」

「は、あ。随分ゐるんですね。」小野はその他の見物人が、自分の代辯に依つて、その僧の説明に耳を傾けてゐるのを、幾らか意識しながら言つた。「で、こんなに澤山の悪魔が集まつて、これからどうするんです。」

「悪魔問答といふのを演るんです。天帝の前で、釋尊に従つて佛果を得たものと、この悪魔どもとが互に問答するんです。そして悪魔が云ひ敗けて、退散する仕組になつてゐるんです。」

その僧も自分の宣傳に、満足したやうな顔付で、幾らか聲を高めて云つた。

「それは誰でも聞けるんですか。」

「え、誰方でも。貴方がたも聞きにおいでなさい。」

「有難う。」小野は禮を述べて、少し引退りながら、もう一度杉浦を顧みて云つた。「どうだい、聞いてゆかうか。」

杉浦の顔にも、捨鉢のやうな気分の中で、ふいと丁度誂へでもしたやうに、この時宜を得た「悪魔行列」に出會つたので、妙に皮肉な興味を感じたらしく、暗い微笑があつた。

「うむ。」彼はすぐ應じた。「そして君もその悪魔の中へ加へて貰へよ。丁度いゝぜ。」

「なアに、貴様こそ！ 全然君の領分ぢやないか。」

さう小野が言ひ返した言葉は、必ずしも杉浦に就いて謂はれるのではないことではなかつた。杉浦、北越の、ある小さくはない寺の、僧職の息子だつた。そして宗教學の、佛敎哲學を研究するために、文科の哲學科に入學させられてゐたのだつた。で、彼は、もとより佛書や經典は好きだつたが、併し最近ではすつかり泰西の思想に觸れて、ステイルネルやニチを好み、一體ならば順當に印度哲學でも研究して、天晴れその宗旨の僧たちの中、新知識や碩學のやうに仰がれて、大きな一山の住職ともなるべきだつたのに、小野や柳井や池田の仲間に入つてすつかり佛敎には反逆してしひ、自らそれらの悪魔の子として、ひそかに任じてゐるのだつた。その上、彼らを襲うた當時の、悪魔的な狂魔的な空氣は、彼の幾らか除翳な自棄の氣持に影響して、彼は何時となく「惡を通して彼岸へ」といふやうな、一種の悪魔哲學を持つてゐるのだつた。現に彼はさうした思想から、百人の人の小指で作つた蠶をかけることを、婆羅門の惡魔に誓つたために、九十九人の人を殺して、最後の百人目にして釋迦に出會ひ、その手で始めて救はれると云ふ筋の、鳥渡長い戯曲さへ賣いたことがあつた。

「兎に角、今は何方も悪魔ぢやないか。」

「それですすがの杉浦も、小野の言ひ返しに對しては、承認の苦笑を返したまふ。」

「など、云つて、その行列のあとから、笑ひながら従いて行つたのだつた。彼らが、行列の後から、見やうに依つては怪しい惡の門とも見える、あの大きな仁王門をくどつて問答のあるといふ觀音堂の廣場の隅の白煉瓦で建てた佛敎傳道館といふのへ、人々に連れて入つて行つた時は、もう館内は一ぱいの群集で、後の方へ立つてゐる外なかつた。が、どうせ妙な興味から、野次半分に來て了つた彼らに取つては、結局その方が却つてよかつた。二人は相並んで、冷たい壁に身を凭せながら、その問答の聞くのを待つてゐた。小野はその宗教的な見物にしては、まだ先刻の酒の酔が、かう館内の燈火に照らされては、顔に赤く残つてゐるのを、誰にもなく恥かしかつてゐた。が、杉浦は淺黒い顔に、八の字鬚と一緒ににやりとした微笑を浮べて、冷嘲しだけに舞臺——といふよりは演臺の方を眺めてゐた。

行列はまだ、樂屋に納まり切らないのか、陰氣な、物倦げな、しかし呆けた例の太鼓が、囃子代りに、とき／＼間遠に響いてゐた。さうして問答はなかく／＼始まらなかつた。

「早くやれ。」やれ、やれ。「結之國屋！」

土地柄で、そんな懸聲をする野次も、三方の壁側に立つてゐる見物の中にあつた。

それに促されてか、やうやくにして一人の年若い僧が、黒衣に光る袈裟を着け、青白い顔に近眼鏡をかけて、舞臺の横手に現はれた。

「では、これから始めますから、どうぞ暫らくの御静聽を願ひます。これは芝居ではないのですから、その積りで、……」

「イヨ、傳ちやんそつくり。」『十六夜清心！』

しかしさういふ先から、見物の中の悪魔が、もう混ぜつ返した。人々の哄笑や、しつと叱る静止の聲の中で、その若い僧は眼をばち／＼はせてゐたが、何か聴取れぬ注意を興へて、禮拜するやうに一揖すると、樂屋口に當る入口へ引込んだ。

やがて太鼓の音が、二三度強く打込まれて、場内が靜まるのを待つて、右手の入口から幕をか上げ、天帝に扮した僧の長い者が、殿な足取りで現はれて、問答を裁くべき、正面の設けの場所へ跌坐した。それは稍又滑稽な、子供だましのやうに見えぬでもなかつたが、しかしその儀式が始まると少し動揺しかけた野次見物も、信者たちの眞面目な叱止に會つたためか、たゞ黙つて見てゐた。

續いて一方から、佛弟子に扮した者が、色彩のある法衣を纏ひ、紅を佛前に窺つて、出てきた。と同時に他方の口からも、先刻の行列にゐた、鬼の面を被つたものが、足を踏み鳴らして現はれた。

すぐ二人の間には、何か譯の分らぬ、問答が始まつた。なんでもその悪魔が、面を被つてゐるために、體の威勢に似合はぬ含み聲で、それでも頻りに相手に向つて、恐らくは禪尊のことを罵つてゐたらしく、やがてそれを聞いてゐた佛弟子が、四言五言反駁すると共に、自分の用は済んだとばかりに言葉も返さず引込んで行つた。さうしてそれと入れ代つて、すぐ又別の悪魔が、大手を振つて現はれた。又問答は始まつた。が、出て来る魔物も出て来る者も、殆どよく解らぬ佛語入りの、それも俄仕込みの白と見えて、時々ぐつと詰つて了つては、後についてゐる僧衣の後見に、付けて貰つて辛うじて言葉を述べた。中にはすつかり上つて了つて、たつた四五言しかない白の、半分位も言へない中にすつかり絶句して了つて、後から注意されても何とも云へずに、どんと誤魔化すやうに足を踏み鳴らして、引込んで了ふものすらあつた。問答を始めて見ると、悪魔らしい手剛い者は、殆ど一人も見當

なかつた。そしてまう云ふことも、ちやんとした哲學的なものでもあつた。魔物の外に、
に經の文句みたくで、面白くも可笑しくもなかつた。

小野と杉浦とは、暫らく辛抱して見てゐたが、初めの皮肉な興味などはすつかり失つて了つて、ただ間の抜けた悪魔共の白を、白けた氣持で眺めてゐた。たゞその佛弟子になつた僧の、恐らくはその男が唯一の本役であらう、可なり明快な説教口調に、やゝ歌舞伎式の抑揚をつけて、激みなく、述べ立てるのを、聞くともなしに聞いてゐるきりだつた。もう野次も、呆れたのか黙つて了つた。

「出ようか。」

「出よう。もう澤山だ。」

『……抑々太子悉達多は、頭に精進の兜を頂き、身に忍辱の鎧をまとひ、……』

といふやうな聲が、無意味に館内に響いてゐるのを聞き捨て、二人はそつと群集の中から、入口を逃れ出るやうに去つた。師走風の吹き立つてゐる、觀音堂の横の廣場には、さすがに人通りも平常より少かつた。

馬鹿らしいやうな、可笑しいやうな、腹立たしいやうな、天の皮肉に對する苦笑感が、暗の中で顔を見合せて、二人を同時に噴き出させた。

「ふ／＼、抑々太子悉達多は、頭に煩惱の炎を燃やし、身に愛慾の思ひを焦がし、……か。下らな

い暇つぶしをした。さあ、何方へ行かう。そこらを廻りして見ようか。」

「いや、もう眞つ直に向うへ行かう。」

杉浦が暗い顔をして、笑ひもせずさう言つた。

から、決してそんなことを發議する男ではなかつた。小野はもう荒み切つた心持で、しつこくさういふと思つた。

と丁度そこに、中位な店構への、女たちを一體に紫紺色の、高尚めかした服装に、飾り立てゝゐる處があつた。それが小野の眼にはいかに、糜爛した感じでない素人の處女のやうな印象を與へたので、たゞそれだけのことを理由に、思ひ切つて杉浦に云ひかけた。

「どうだい、こゝは。」

「うむ。」と杉浦は眉を上げて、その格子の中を覗きながら、暗い微笑を浮べて應じた。「いゝぢやないか、小野趣味で。上れよ。」

「君は？」

「俺はこゝを一廻りして、ゴム人形の處へ上る。」

「さうか。ぢやあさうしろよ。俺はもう歩きたくない。」

成程杉浦は、さういふ積りだつたのかと、小野は少し恨みがましい氣がしたが、杉浦の後から同じ樓へついでゆくのが、この際鳥渡業腹の氣がしたので、別れ／＼になる決心を定めた。

杉浦の「ゴム人形」といふのは、彼が一兩年前に、ふとした悪友に連れられて行つて、買ひ馴染んだある小店の女だつた。その女は杉浦の、初めての場所へ来た晩に、物珍らしげにうつかり見て歩いてゐるところを、格子の先で煙管を着物に巻きつけ、ひつ捕へて放さなかつた。杉浦の方でも、その圓い、ちよびつとした、ゴム人形のやうにあどけない所のある女を、稍氣に入つたらしく、その夜初めてそこへ上つた。そして彼はそのときが、殆ど女を知つた初めてだつたので、——彼らはその頃みんなかうして、慘憺たる重貞の最後を遂げたのだつた。——忽ち彼はその女に夢中になつて了つた。

そこで二人は公園の方へ出て、そこから更に北の方へ、狭い癖に人通りの多い道を、擦り抜けるやうにして急いだ。明るい、がや／＼した、誰かに出會ひさうな恐怖のある、そして人力車の激しい往來と、その懸聲とに脅かされ勝ちな衝が、しばらくして割合に暗い、小高い土手めいた道へ出ると、やがて彼らの目の前には、怪しい光の城廓が、夜の空を彩つて現はれた。

二人は人々の間に交つて、その廓内へ吸ひ込まれて行つた。彼らは殆ど人の流れに従つて、まづ一番手前の横町へ折れた。そして左右に楯比してゐる、電燈を軒下にすらりとかけ連ねた、建物に威嚇されながら、その下の格子の間から溢れ出る、夥しい電燈や瓦斯の明りを浴びて、その中に蠢く紅紫錯落した化性の者の姿を、それからそれと漁り歩いた。

小野は誰にもなく面映ゆげな心持から、成るべく人々の後に隠れるやうにして、小路の眞ん中から左右を速く覗き見ながら、立つて格子へ寄つてきたり、坐つたまゝ手招ぎしたり、わざと斜に火鉢に身を寄せて、カン／＼と煙管の音を響かせたりしてゐる、いろ／＼な姿態を垣間見た。が、杉浦は寧ろ昂然として、睥睨するやうに正面から覗き込んで、何かと執念深く物をいひかける妓夫に、皮肉な嘲罵を浴びせたりした。二人は横町を突き當ると、右へ折れた右へ折れた。そして殆ど卍字形を描いて、あらゆる廓内の通りを、——と小野には感ぜられた。——物色し盡さうとした。もう小野は妙な羞恥と、不安と疲勞とに、いゝ家を見立てゝ上るなぞといふ甲斐性を、殆ど失つてゐた。どこかへ早く杉浦が、自分たちの落着場所を見出してくれ、ばい／＼と思つて、酔の醒めかゝつた顔を、寒風に吹き晒されながら、暗い泣くやうな心持で、人々の後から彷徨して歩いた。が、杉浦は彼の方

かうして二年過ぎた。勿論その間には、時々杉浦もその女を助けたが、それはそれであつた。美しいことのやうに、小野にも考へられる程になつてゐた。で、彼は今杉浦が、そこへ行かうとすることを、鳥渡厭な氣がしないでもなかつたが、引止める氣は更になかつた。

「ぢやあ、明日の朝、僕の方から行くから、そこで落合ふことにしよう。一人で歸つちや厭だぜ。」

「うむ。ぢやあその積りで待つてるよ。」

二人はかう打合せをして、そして分れ／＼になつた。小野は思ひ切つて、一人その店へ上つて、不面目な不安な一夜を、浅い眠りの中に過さねばならなかつた。それは誇張でもなんでもなく、小野に取つては一種の苦痛の多い一夜だつた。……

翌朝、約束に従つて、小野は杉浦と落合ふために、見知つてゐるその女の樓へ赴いた。そして朝の白々とした光の中に、淺ましく取散らかつてゐる玄關に立つて、その旨を番頭めいた男に通じると、やがて二階から懶げに、ばたり／＼と草履の音を立て、ゴム人形それ自身がおりて來た。

「お上んなさいよ。今起しますから。」

彼女は小野をさも十年の知己のやうに、そのちよびりとした顔を、親しげに、つと笑つて見せて、かう勧めた。で、彼はそんな入口に、立つて待つてゐるよりはと思つて、一とまづ二階へ上ることにした。

上つて、二階の隅の、彼女の本部屋らしい處へ入つて見ると、杉浦はもう誰かに起されたと見えて長火鉢の横で着物を着かへてゐる所だつた。

「やあ。」

「やあ。」

二人は不面目な顔に、樂つたい笑みを浮べて、強ひて、浮々と挨拶し合つた。

「まあ、お出花でも召し上げな。うちの人の支度ができる間。」

それには彼の思想上の破産と、また家庭に對する反抗的な自棄も手傳つた。彼は別人のやうになつて一時その女の許へ通ひつめた。そして小野を初めいろ／＼な友人たちに迷惑をかけた。小野は彼の金がなくて歸れないでゐるところへ、友人の時計を借りて質にいれ、救ひ出して來たこともあつた。小野自身は、さうした世界へ足を踏みいれるや否や、殆ど第一回目に恐ろしい罰を受けたので、一つはそれに懲りて餘り寄りつかなくなつたばかりか、杉浦及び彼と一味の悪友たちが、ひどく荒んでゆくのに妙な反抗を以て、決して聖人ぶつてではなく、杉浦のさういふ生活に對して幾度か忠告めいたことを云つた。そして餘りにその忠告が過ぎたために、二人はあんなに親しかつたのを、一時絶交同様になつてゐたことすらあつた。そのため杉浦は學校も一年遅れた。そして小野も殆ど愛相を盡かしたやうに、心配しながら放つておく外なかつた中に、親たちが心配して一と夏故郷へ連れ歸られてゐた彼から、同じく歸省中の小野へ宛て、友情の恢復を願ふ懐しげな手紙が來た。それには青年らしい感激で、今迄の彼の生活から脱離して、再び小野たちの手へ歸りたい山を、涙を以て書かれてあつた。矢つ張りあんな生活をして、強ひて離れてゐる間でも、君が一番懐しかつたと書いてあつた。感動し易い小野は勿論それを涙なしに讀み得なかつた。彼は杉浦に對する自分の友誼が、やうやく再び通じたことを、心から喜んで返事を出した。杉浦の方からも更に折り返して、更に感傷的な手紙が來た。小野もすぐに酬いた。二人の友情は忽ち復活した。さうしてその九月、新學期が始まつたときは、二人は前にも増して、殆ど一刻も離れないやうな、新しい友誼の中にあつた。二人は同じ下宿の同じ部屋にもゐた。そして決して喧嘩などをしたことはなく、都合で下宿は分れ／＼になつても、毎日必ず往來してゐた。その間杉浦はもう、その女の許へも熱中して通ふやうなことはなかつた。二人の友情の復活が、杉浦を生活上の危機から救つた。さうも云へないことはなかつたのだつた。

女は長火鉢の處へ、小野を請じてかうもてなしたりした。
 小野はそこへ坐つて、すつかり無知な好機嫌で、應ぜざるを得なかつた。
 「いや、有難う。——早く迎ひに来て濟まなかつたね。もつと後朝を惜しまたいんで、俺を殺したくはないかい。」

「本當よ。三千世界の鳥を殺してね。」
 女も無知な洒落を返した。

「だが、お禮をお云ひよ。俺がこの男を連れて来てやつたんだぜ。」

「有難う。お禮を云ふわよ。けれど、どうせ連れて来てくださるんなら、もつと滋々連れて来て頂戴よ。ほんとにこの人つたら、あの後まるで忘れたやうに、一年に一度位しか来ないのよ。七夕さまよりひどいわ。」

女は杉浦の帯をしめ袴を穿くのを、横目でちらと睨んだ。

「あの後つていへば、あの時分二三度、こゝへ杉浦を迎へに来たつけなわ。」

小野もそんなことを思ひ出して、鳥渡感懐深げに四邊を見廻した。大きな、なんのための人形か、硝子箱の中へ大切さうにいでて、簞笥の上にあつた。床柱のやうな處には、市村羽左衛門の助六姿が舊式の繪葉書挿にかゝつてゐた。それらはすつかりそのときと、違つてゐないやうな氣さへした。

「ほんとにあの時分は、面白かつたわねえ。だけど杉浦さんは、ほんとに變つた學生さんだつたわ。格子口に立つてゐると、ほんとに口の悪い皮肉なんぞばかり云つて、上つて了ふと、黙つてばかりゐるんだもの。そつと床の中で、泣いてたりしたこともあつたわね。初心だつたのよ。あの頃は、私時時思ひ出すのよ。あの頃はほんとに面白かつたわ。」

「ふん。」小野は鳥渡苦い顔をした。「俺たちは本當で随分面白くなかつた。」

「ぢや、行かうか。」

杉浦は丁度支度ができて、さう促した。

「貴方、お顔は。」

「顔なんざア家へ歸つてから洗ふさ。」

小野もできるだけ早く、こんな處にゐられないやうな氣持で、すぐ立上つた。そして二人は梯子段をおりて、女や番頭たちの別れの言葉を後にしながら、誰ともないが誰か見てゐやしまいかといふ不安の中に、つと玄關を飛出した。

二人はすぐ電車に乗るのが厭で、暫らく歩くことにした。大門を出て、近道の日本堤をすぐ横に切れるとこの思はしい歡樂境の裏の断面が、鉛色の切小口のやうに、處々に四角い窓を見せて、溝に沿うて立並んで見えた。二人は見たくもないものを見たやうに顔を外向けて、足を急がせた。冬の灰色の霧が、冷たく淡く四邊を罩めて、寝不足に荒れた彼らの頬に、朝の大氣はびりりと浸みるやうだつた。二人は黙りこくつて、互の顔をも見ずに、上野の山の方へ出た。さうして歩くのが、昨夜の悪行の償ひでもあるかのやうに、また何ものにか課せられた罰でもあるやうに。

彼らが歩いて、本郷の小野の下宿まで歸つて来たのは、もう十時頃だつた。それから二人は、うそ寒い小野の部屋に坐つて、そして黙つて顔を見合せた。

「どうだい。湯にでも行つて来ようか。」

「行かう。」

二人は女中に、湯に入つてくる間、牛肉を取つておくやうに命じて、そして近所の銭湯へ行つた。

湯から上ると、幾らか夜來の悪行が洗ひ去られたやうに、二人は清々して歸つて來た。もう命じたまは、薄笑ひを浮べた女中の手によつて、部屋の中に運ばれてゐた。焔爐に火はかつかど燃えて、薄暗い室内も暖かさうに見えた。

「有難う。」

小野は溜息と一緒に、さう懸つたやうな聲を出して、その火の傍に坐つた。杉浦もいそぐとその向うに座を占めた。さうしてやがてちつと肉の煮える音と共に、彼らの審使ひは忙しくなつて行つた。

やがて彼らは腹の満ちると共に、幾らか勇氣を恢復して來た。が、それでもまだ、夜來の悪行の後悔が、重く彼らを壓迫して、黙り勝ちだつた。どうかした拍子に、

「あの鳩は、どうしたらうな。」

と、小野はふとさう口に出して見た。が、杉浦はたゞ、

「さあ、どうしたらう。」

と、暗い顔をしたただけだつた。さうしてまた話は途切れて了つた。

すると、そのときだつた。廊下の方から、ばた／＼と女中の急いで走つてくる足音がして、彼らの部屋の前で止るか止らない中に、かう呼ぶ聲が聞えた。

「小野さん。お電話ですよ。黒田さんと仰有る方から。」

「うむ。」と小野は陰鬱に答へて、黒田が、峻烈な新進の批評家で、矢つ張り勝負先生門下の、彼らと親しい仲であるが、今時分なんの用事があるのだらうと思つて、急いで電話口へ出た。

「あゝもし／＼、僕小野ですが。……」

さう云ふか云はない中に、聞き馴れた黒田の、さらでも甲高い調子が、少し急ぎ込み腹もに、電話器の中できんといふ程鳴り響いた。

「あ、小野君ですか。僕は今勝負家に來てゐるんですがね。先生がもう危篤なんです。あと一二時間持たれるかどうか解りません。」

「はあ、さうですか。」

小野は受話器を耳に當てたまゝ、電光に打たれたやうに驚いた。そして何者にか、いまの自分たちの有様を、叱咤されたやうにはつとなつた。

「君と柳井君とは、木曜日にくる人たちの中でも、特別に先生に親しい方だから、特別にお知らせしろと言ふので、僕からお知らせします。君からどうか柳井君の方へ、すぐ知らしてくれ給へ。此方から電報を打つてもいいが、居所が分らないから。……」

「あ、さうですか。分りました。ちやあ先生の死目に會へるやうに、すぐ其方へ伺つてもいいでせうか。」

門下生と云つても、たゞ木曜日に話を聞きに上るといふだけで、他の古い黒田たちのやうに、お宅の方とはさう深い交際もない小野は、それだけの遠慮をしなければならなかつた。

「今からすぐ來れば、死目に會はれるかも知れません。先輩や門下の人たちが皆來てゐて、家が狭いから一般には知らしてないんだけれど、君だけ位なら來ていいでせう。すぐ來給へ。ちや柳井君の方は宜しく頼みますよ。」

「えゝ承知しました。——大變な事になりましたな。」

小野は思ひ出したやうに、上つつた聲でさう附け足した。

先生の危篤！ それは全く今の小野に取つて、晴天の霹靂の如きものであつた。殊に、昨夜は妙な不安に驅られてゐたとはいへ、あゝいふ人にも云へない悪所に行つてゐて、悔恨に満ちて歸つて来たところへ、突然受取つたその報知は、凶報そのものの性質と共に、彼の至良心を妙に揺り動かした。彼はなんの理由もなく、自分の昨夜の悪行と、先生の危篤とが、原因結果をなしてゐるやうに、ひそかに思はれてならなかつた。それだけに下宿を出た彼の心は、十二月初旬の薄曇つた、灰色の重い空の中、深い悔恨の色に染められ重く胸を壓されてゐた。彼は氣の急ぐまゝに、殆ど半ば跼足で電車通りの方へ出る間、そのことに思ひ至つては、足を停めるやうな思ひで、心の中でなにものか詫びた。そしてこの凶報を天の警告と見、先生の叱責とも見て、以後は決してそんな所業を、あんな生活を繰り返すまいと、なにものにも知れず誓つた。「悪かつた。もう決してしまひ。決して……」そんなことを彼は呟きながら、彼は氣狂ひのやうに足を早めたり、かと思ふと急に緩めたりした。そして五分たぬ中に、その正門前の電車の停留所に着いた。

が、彼は電車に乗る前に、まづ鎌倉にゐる柳井のところへ、電報を打たなければならなかつた。彼は更に急いで、その近所の青塗りの小さな郵便局へ起いた。さうして頼信紙を乞うて、電文を書きつけた。初め「センセイキトスグゴイ」と書いたが、ふと思ひ返して、それが向うで誰か柳井以外の人によつて開かれた場合、すぐそれと解るやうに心遣ひをした上、先生の名が局員の目に觸れば、幾らか特別な手續きを取つてくれないものでもないかと考へ、そのうへに先生の號を書き加へた。そして更にまた柳井が、昨日會つた時の話では、今日彼の歡迎會がある筈なので、彼の家とその鎌倉の

三

「兎に角、すぐ來給へ。ぢや左様なら。」

「左様なら。——」

小野は心臓がわく／＼して、思はず慄へる手で受話器をかけて了ふと、慌てゝ電話室を飛び出した。さうして長い距離でも駈けて來たやうに、妙に息を切らして棒立ちになつたまゝ、杉浦に告げ知らした。

「おい杉浦。大變だ。勝負先生が危篤だつて！ 黒田君からさういふ電話なんだ。僕はこれからすぐ行つてくるから、君も一旦下宿へ歸つて、いろ／＼な用を済まして了つたら、彼らにはその當時出してゐた同人雜誌の事で、發行人になつてゐる杉浦には、其日いろ／＼な用務がある筈になつてゐた。そしてまた黒田の成るべく一人で來いといふやうな、口向もないではなかつた。事實また杉浦は、柳井や小野に比べれば、先生にさう親しいといふ方でもなかつた。一度僕に電話でもかけて見て、その都合でやつて來ないか。兎に角僕はかうしちやゐられなう。」

「さうか。ぢやあ行つて來給へ。後はい、やうにするから。——さうか。先生もそんなに悪かつたのかなあ。さういへばどうも昨夜から、なんだか胸騒ぎがしてならなかつた。」

杉浦は暗い顔に例の八の字を寄せて、驚いてそんな風に嘆じてゐた。

「さうだ。この前兆だつたんだ。それに君が鳩なんぞ捉へてくるんだもの。」

小野は眞面目で、袴を締め直しながら、そんなことを云つてゐた。そして袴を締め終ると、あまた帽子を取つて、

「そんなら行つてくるよ。——あゝ、ほんとにどうか生きてゐてくれ、ばい、がなあ。……」

と、呟きつゝ、急いで下宿の玄關の方へと出て行つた。

料亭とに向け、同文の二通作つて、その宴席の半ばに、飛報に接して驚く彼の姿を、気が急ぐ中にもはつきり想像しながら、その金網口へ差し出した。

併し局員は、全く無感動で受取つて、そして極めて事務的に言つた。

「同文電報です。三十銭です。」

小野は懐中を探つて、生憎それつきりしか残つてゐない、五圓紙幣を一枚取り出した。丁度小銭拂底の頃だつた。

「もつと小さいのはございますまいか。」

小野は囊底を調べたが、そこには辛うじて、電車賃に足りるか足りぬ程しかなかつた。

「ありません。どうかそれで取つて下さい。」

彼は気が氣ではないので、噛みつくやうに云つた。

「此方にも釣銭がないんですが、どうかして来て頂きますまいか。」

小野は局員が、いかにも無感動なのに、内心ひどく腹を立てた。が、腹を立てても仕方がないので、訴へるやうに調子を柔けて、そして云つた。

「今、その借文に書いてある通り、勝見といふ僕らの先生が、危篤な場合なんです。僕急いでゐるんです。だから、どうかして下さい。」

局員は、やうやく勝見澆石先生の存在をそのとき認めたらしく、また小野の緊張した顔付にも、少し蹴押されたらしかつた。

「さうですか。では電報料は、後でお届け下さい。打つておきますから。」

「では、さうして下さい。」

小野は急いで郵便局を飛び出すと、向うからくる電車に、間に合ふやうに停留所へ駆けつけた。料金は貸して貰つて梟がついたもの、郵便局での鳥渡した停滞が、ひどく彼の氣持を急かせてゐた。一體に彼は何事にも、かつと逆上して了ふ性質だつた。

彼は電車に辛うじて飛び乗つた。そして心急ぐ身體を、吊革に縋つて揺られてゐた。併しさうして心急ぎながら、彼は四邊の乗客を見廻して、なんとなく先生の危篤であるといふことを、皆に知らせてやりたいやうな氣がした。誰かどなたら、きつと高聲に、話したに違ひなかつた。見知らぬ乗客たち、新聞をひろげて、そのとき矢つ張り先生と同じく、危態に瀕してゐたある有名な將軍の病狀が、大きく出てゐるのを、讀んでゐる姿を見ると、彼はなんとはなしに腹が立つた。そのあばた面の、大きな老將軍のことは、彼も決して嫌ひでなかつた。寡黙でつそりした將軍は、かつて日露戦争の總司令官をしてゐたとき、地圖を擴げてゐるところへ、敵の一彈が幕營のすぐ近くへ、おちて炸裂したことがあつたさうだが、そのとき將軍は思はず地圖の上へ、あの大きな顔を伏せて了つたが、やがてそれが爆發して了ふと、暫らくしてゆつくり顔を上げ、「ア、おちたか。」と木けた静かさで呟いて、その方を見やつたといふ話も、彼が非常に好きな逸話だつた。だからその將軍の容態も、興味を持つて日々の紙上で注意してゐないではなかつたが、今はもつと重大な人のことが、彼の心をすつかり占めてゐた。彼はその新聞を讀んでゐる乗客に向つて、「そんなことではない。もつと肝腎な人が死にかつてゐるんだ。」と注意してやりたいやうな氣持でゐた。

牛込行へ乗り換へるために、松住町の停留所で、一旦下車すると、そこに伊東といふ彼らの高等學校時代の、獨逸語の先生が黒い外套を着て立つてゐた。その姿を見た時、彼はその先生には悪いが、なぜかその小柄な黒い姿に、凶兆といふやうな氣を起した。が、併しすぐその伊東先生も、勝見先生

の家へ見舞に行くところだなと思つた。伊東先生は勝見先生と大學の同期生だつた。そしてその先生の現在の住んでゐる駒込の家は、勝見先生の處女作で名高い、例の苦沙彌先生の家だつた。それはもとく、伊東先生の家だつたのを、その持ち主が仙臺の高等學校へ行つてゐる留守中、友人の勝見先生が借りてゐたといふ話は、門下生の間にもよく知られてゐた。

で、この際小野は、高等學校にゐた時分、かなり怖い感じを抱いてゐたのも忘れて、慕しげに帽子を取つて挨拶した。

「先生も勝見先生の所へいらつしやるのですか。」

「ええ。」伊東氏は小さなきりりとした顔の、黒い聰慧さうな眼をしばたいた。「大分悪いと聞いたから、鳥渡見舞に行かうと思つて。」

「もう危篤ださうです。私もこれから参るんですが、死目にお會ひできればいいと思つてゐるんです。」

「そんなに悪いんですか。」

伊東氏も最近の急變は、まだ知らなかつたと見えて、小さな顔の中の眼を瞬つた。

そこへ電車が來たので、小野は伊東氏と一緒に乗り込んだ。その電車は更に混んでゐて、二人は近く相控して、立つてゐなければならなかつた。

「一緒に大學にゐる時分は、勝見もあんな小説家にならうとは、夢にも思つてゐなかつたがね。」

伊東氏はそんな風に話しかけた。その口調にはなんとなく、官學的な教授氣質で、放肆な創作家といふやうなものに、懽惑を持つてゐるやうだつた。そして殊に在學當時から、小野らの創作的傾向にさう好意を持つてくれないのを知つてゐるので、彼は幾らか僻んでさう取らざるを得なかつた。

「はア！」彼はそんな風に應じてゐた。先刻の、人に話しかけたいやうな心持は、なんだかもう影を

ひそめて、一人で先生の生涯や業績を、思ひ沁めたいやうな思ひだつた。

併し伊東氏の話は、そんなことから引續いて、最近の先生の創作にまで及んだ。

「……此頃のはなんだか、心理學の講義を聞いてゐるやうで、私らには面白味が解りません。」

「はあ、さうですか。」

小野は仕方なしに、そんな風な合槌を打つて、聞いてゐなければならなかつた。彼にはもうなんだか、時間の經つにつれ、電車の緩いものにつれて、さうした批評的な話題に、固執することの出来ないやうな、亂れた氣持が起つて來た。彼は伊東氏の平靜を、羨ましいやうな腹立たしいやうな、焦立つ氣持で眺めてゐた。彼の氣持は確に、平衡を失してゐた。

牛込柳町の停留所でありると、彼の心の中なる焦慮は、先生の家まで歩いて行く餘裕を起させなかつた。それで、猶も電車をおりてから、

「勝見君が、あゝいふ小説をかけるのも、學問の根柢が深いからですよ。」と訓戒的に話しかける氏を思ひ切つて離れて、

「なんだか氣が急きますから、失禮ですが俥に乘ります。」と、その車夫を呼んだ。

「さうですか。どうせ僕などは、今急いで行つたつて仕方がないから、歩いて行きます。」

「では、お先に、失禮します。」
小野を乗せた俥は、眞つ直に榎町の方へ走つて、それから先生の家のある、狭い横町へ曲り、その黒塗りの門前で止つた。